太宰治全集

12

筑摩書房

太宰治全集第十二巻

昭和四十三年二月十五日初版第一刷発行
昭和四十五年六月三十日初版第六刷発行

著者　太宰治

発行者　竹之内静雄

発行所　株式會社　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一(代表)
振替　東京　四一二三

印刷・三晃印刷
製本・鈴木製本

(分類) 0393 (製品) 70012 (出版社) 4604

第十二卷　目次

初期作品

溫泉　五
最後の太閤　六
虛勢　九
角力　二四
犧牲　二六
負けぎらひト敗北ト　三三
地圖　四四
私のシゴト　五三
侏儒樂　五七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

針醫の圭樹　六五
瘤　七二
將軍　七六
傴僂　八一
哄笑に至る　八四
口紅　九二
埋め合せ　九八
再び埋め合せ　一〇〇
モナコ小景　一〇六
怪談　一一四
名君　一二五

無間奈落　一三四
股をくゞる　一八三
彼等とそのいとしき母　一九六
此の夫婦　二一
鈴打　二三
虎徹宵話　二六
哀蚊　二七
花火　二五
地主一代　二五九
學生群　二九九

補遺

文藝時評　三七三
俳句　三七六
ねこ　三七八
あさましきもの　三七九
魚服記について　三八三
洋之助の氣焰　三八四
飾らぬ生水晶　四〇一
Alles oder Nichts　四〇四
「二十世紀旗手」斷片　四〇六
女人創造　四一三

ラロシフコー　四一五
「惜別」の意圖　四一七
「大鴉」斷片　四二〇
春　四二三
年譜　四三五
後記　四五一

太宰治全集

第十二卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

初期作品

溫　泉

綺麗なお湯だ、サウダ、まるで水晶をとかした様に美しい、僕の身體を入れるのは何だかもつたいない様な氣がした。そつと湯壺に入る、湯があふれてチョロ〳〵流れ出した、をしいことをしたとも思つた、フタ〳〵と小さい波が湯壺の中に起つた。いゝ氣持だ、日光はサツとスリガラス越しに湯の底までさしこんだ。湯は元のやうに靜かになつて僕の身體を包んでゐる。ほんとうに明るい、雀が外でチ、、とないた。ふと明り窓の方をながめやる、庭の木の葉の影が黑く墨繪のやうにスリガラスに寫つて居た。サラ〳〵〳〵と細かに動いて居る。一枚の木の葉がハラ〳〵と落ちた……なんだか淋しくなつた。妙にからだがダルくなつた。湯から白い湯氣がゆるやかに上る、思ふ存分手をのばして見るともなしに爪を見た、のびてるナアーはさまねばなるまいと考へた。ほんとうに靜かだ、僕の身も魂も湯氣と共に天上に浮きたつ様な氣がした……靜かに目をとぢた……

（大正十二年十月十五日執筆　「蜃氣樓」大正十四年十月號）

最後の太閤

それは太閤の命も已に、あやふく見えた時であつた。宏大な伏見城の奥のうす暗い大廣間である。廣間には諸侯がうよ〳〵とうごめいて居る。陰氣な暗い重い濕つた空氣がぐん〳〵（原文ノママ）とさゝやく彼等の言葉さへなんとなく暗く思はれた。裏山の杉の林からジージージージージーと暑苦しい重たさうな蟬の聲がはつきり聞えて來る。

隣部屋に寢て居る太閤は今どんなことを考へて居るだらう。傍には秀賴も居る。淀方も居る。しかし北政所方の居ないのは妙にさびしい。太閤は目を細く開いて秀賴の顏を見上げた。淀方の方に眸をむけた。隣間の諸侯の話聲に耳をかたむけた。そして彼は又滿足氣に目をつぶつた。彼の頭には色々な考へが幻の如く、まはり燈籠の如く浮んで來た。父、彌右衞門と山に薪をとりに行く彼の姿。父は彼の頰にキツスをした。父と子——飾りけのない貴い姿——あの時と今と——

彼はウツトリとなつて居た。そして考へは次から次へと進んで行つた。

天文十年のことであつた。山崎で逆臣光秀を討つて主君の仇を報いた時の嬉しさ。彼はたつた今でもそれを味はふことが出來た。

つゞいて起つた賤ヶ嶽の戰。それらは皆眼前に幻となつてはつきりと現はれた。彼の口元には勝

ほこつた者のやうな微笑が浮び出た。同十二年!! 小牧山の戰!! 彼の微笑がもう顏のどこにも見あたらなくなつて居た。どうしても德川公を亡ぼすことが出來ず和睦を申し込んだ時の彼の心『わしともあらうものが……』と彼は彼自身にも聞きとれさうもない程ひくい〳〵ひとりごとをもらした。隣間から德川公の咳がゴホン〳〵とじめ〳〵した空氣を傳つて彼の耳にとゞいた。彼の顏色はだん〳〵暗くなつて行つた。

關白—太政大臣、彼の榮達は實に古今に類がなかつた。あの當時の彼の勢。彼は今それを思ひ出したのである。自分でさへ自分自身の勢が恐ろしくてたまらなかつた位であつた。彼はもうたまらなくなつてウーとうなり出した。聚樂第の御幸! 文武百官を率ゐて諸侯と共に『天皇をうやまひ申す』との誓ひを立てた時の有樣は……おゝ彼の目は涙でうるんで居る。太閤は心から泣いた。君恩は彼を泣かしめたのだ。四邊の空氣は尙一層じめ〳〵して來た。文祿元年の朝鮮征伐が目の先にちらついて來た。彼はどこを見るともなくまた目を開いた。彼の手はかたく〳〵にぎられて居た。汗まで手の中にひそんで居た。

彼は急にフーと長い〳〵歎息をもらした。

慶長元年の明使をおつぱらつた時の光景が目の前に浮び出たのである。

しかし彼はすぐにはれやかな色を顏にたゞよはした。彼はあのはなやかであつた彼の醍醐の花見を思ひ出したのだ。ほゝゑみが彼のやせこけた頰にうかんだ。もう彼の頭はボーとして來て何が何やらさつぱりわからなくなつてしまつた。……秀賴の顏が大きく〳〵彼の目の前に幻となつて現れた。

そして秀賴はニッコリ笑つた。太閤はもうたへられなくなつてしまつた。そして大聲でウハッハッハッハッハッハッと笑ひこけてしまつた。枕もとに侍つて居た人々は驚異の目を見はつた。隣間の諸

侯が急にがや〳〵とさわぎ始めた。それをおし靜めて居るのが前田公であつた。

あゝ一世代の英雄太閤は遂に沒した。

その死顏に微笑を浮べて……。

華かなりし彼の一生よ。

廣間の中からはすゝり泣きの聲が洩れて來た。諸侯は誰も面を上げ得なかつた。

夕日は血がにじむやうな毒々しい赤黑い光線を室になげつけた。諸侯の顏も衣服も皆血で洗はれてしまつたやうに見える。否彼等の心に迄も血がにじんで居るだらう。裏の林の蟬が又一しきり鳴き始めた。

夕日はかくして次第に西山に沈んで行く……。太閤はかくしてあの世に沈んで行つたのである。

（「青森中學校校友會誌」大正十四年三月號）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com